

アーノルドとアメリカ

川 田 周 雄

一八八三年十月十五日、ニュー・ヨークについたキューナード会社の英国船「サーヴィア号」は、アーノルドを初めてアメリカの地に運んだ。鋼鉄王アンドルー・カーネギーが自から秘書と共に出迎え、宿舎ウィンザー・ホテルに案内したのであるが、アメリカにおける彼の第一印象はそのパブリシティの激しさであった。五ヶ月に亙る彼の講演旅行の采配をふるマネジャーがまず彼に求めたことは、面会を断わらぬこと、ことに新聞記者には必ず会うということであった。お蔭でホテルにつくやいなや、彼はひつきりなしの面会者に悩まされた。当時のアメリカでアーノルドの名がどの程度に知られていたかについては、只今詳かにしないが、彼を最も尊敬していた作家が、後に英国に帰化したヘンリー・ジェイムズであったという一事は象徴的であると云えよう。いずれにしても、英国における彼の名声が、詩人、詩学教授、文明批評家、宗教論家という経路をとって拡まったのとは反対に、アメリカではまず宗教論、ことに『文学と教義』の著者として知られ、ついでその詩や他の散文が読まれるに至ったものであることは間違いない。事実、各地に旅をするうちに、アーノルドはこの旧著の愛読者を所々に見出したことが、その書簡によって窺われるのである。このことは一面においてアーノルドに幸であったとも云えよう。偏狭な清教主義の攻撃者として、アメリカ、ことにニュー・イングランドに多くの敵を作ったであろうとは想像されるが、キリスト教の本質として彼が提示したものは、一般の新教徒にとってさして受入れ難いものではなかったと思われる。アメリカ人として

は、アメリカ式デモクラシー、機械的、物質的産業主義文明の攻撃の方に、むしろ強い反撥を感じたであろう。従ってこの方面での彼の著作があまり知られていない方が、アーノルドとしては気が楽であった筈である。然しそれにしても、いわば脛に傷もつ彼は、アメリカに携えていった三つの講演の草稿を書くに当っては、相当地に神経を使ったようである。後に『アメリカ講演集』に収められた『多数論』『文学と科学』『エマスン』の三篇がこれであるが、このうち『文学と科学』は前年、一八八二年にケンブリッジで行ったリード・レクチャーに多少加筆したものであり、その内容も古典教育の重要性というさして当り障りのないものであったから問題はなかったのであるが、一風変わった社会批評である『多数論』に苦勞したことは、出発を目前に控えた十月五日に姉のフォースター夫人に宛てた手紙に述べられている。最後の文学論『エマスン』は、恐らく彼が最大の努力と細心の注意を払って書き上げたものであり、三篇のうちで最も重要なものであるが、彼はこれを英国を立つ前に完成することは出来なかった。船中でエマソンの作品を読みかえしつつ想をねり、米大陸に渡ってからやっと書き上げられたものであった。その上、これをコンコードでは用いない方がよいという一米人の注意もあって、同地の講演会では『多数論』をこれに代えている。然し本稿の目的は、アーノルドの訪米旅行の足跡をたどり、アメリカ文明についての彼の考えをまとめることにあるので、この一篇に直接ふれるつもりはない。

さて私は主としてアーノルドの書簡から、彼の旅行の模様をさぐることにしよう。但し多忙な旅の寸暇をぬすんで書かれた手紙も多いので、多少本人の記憶の誤りと思われることが日付などの点に認められることから推して、内容上にも同様のスリップがあろうと想像されるということ、さらに本人が直接見聞したことが必ずしも事態の真相を伝えるものでもなく、まして故郷の親戚知友に書き送るに当っては、自身の見聞にすら多少の手心が加えられるであろうという点は予め考慮しておかねばならない。この点を補正するために最上のアメリカ側の資料を、不幸にして未だ入手していない筆者は、トリリング教授の旧著『マシュー・アーノルド』の最後の章に頼るほかはなかった。他日更

に詳細に検討する機会を得たいと思つている。

アーノルドがニュー・ヨークに上陸したのは十二月十五日であつたと言つたが、この時彼は単身渡来したのではなく、妻と娘のルシーを同伴していたのであつた。この親子三人が常に行を共にした訳ではない。ことに一部のニュー・ヨークの社交界に温かく迎えられたルシーは、この都会が気に入つて父に随行せず、田舎廻りのアーノルドを淋しがらせた許りでなく、結局この地に好伴侶を得て家庭をもつに至つたのである。元イェール及びコロンビア大学の英文学教授アーノルド・ホイットリッジ氏はこの女性の息に当る。それはさておき、新大陸での第一声は、到着後二週間の十月三十日に予定されていた。それまでの間は、カーネギー主催のリセプションでグラント將軍、シオダー・ドワイト、ダムロツシュの如き名士にひき合されたり、多くの家庭に招かれたりする傍ら、面会者やサイン蒐集家の追跡をのがれて、ゲストとして迎えられた二三のクラブに身をかくし、『エマス』の執筆や故国への便りに多忙であつた様子である。ここでアーノルドがどのような印象をアメリカ人に与えたかを見るのは、興味があることであらう。さきに私は、この国で彼の文明論が宗教論ほどに知られていなかったことが彼に幸したと云つたが、これは講演会に入場券を買つてやつて来る一般聴衆についてのことであつて、知識人やジャーナリスト、また彼を家庭に招くほどの人々はもちろんその限りではなく、紳士の本場から来る教養の神様としてのアーノルドに、強い好奇心がもたれていたことは当然であらう。そしてこの神様が意外にも洗練をかけた、至極がさつな人物であつたとか、煉瓦工かストライキのリーダーよろしくであるとかいう批評は、教養というものについての当時のアメリカ人の考えの一端を暗示しているものと見られるであらう。また主として彼を招待した家庭の主婦たちの間に、アーノルドは至つて行儀の悪い男だという噂が拡まつたという事実も、たとえそれが一種の伝説にすぎなかつたことが明らかになされたとしても、イギリスの名士に対するアメリカ人の反応の一つとして興味ある現象である。元來アーノルドという人間は、自からが知的貴族であつた許りでなく、本物の貴族や王室、さらに新興ブルジョワにさえ強い関心をもつていた。

自国ではロスチャイルド家に屢々出入りし、旧大陸ではドイツ皇帝や貴族の宮廷に招かれたことを誇りとし、現にアメリカでも、世界一の富豪に会いたいと云い張って、カーネギー（この人自身金持ではあったが、一代で財を築き、平民的な気質の人であった）の反対にも拘らず、ヴァンダービルト家の出の一夫人に会っている。こうした彼のことであるから、少くとも欧州風のエチケットに欠けることがあったとは考えられない。お茶に出されたパンケーキをさして「お前ひとつやってごらん。見かけほどひどいものじゃないよ」と妻にすすめたという伝説に多少の真実があるとすれば、アメリカ流の気さくなやり方を真似ようとして失敗した一例ではなからうかと想像される。もつとも形に出なくとも、アーノルドの心中にひそむアメリカ蔑視の気持が、鋭いホステスの眼光に見破られたということなら話は別である。いまだ完全に精神的独立を達成していなかったこの時代のアメリカ人が、いかに旧大陸人の一挙一動に敏感に反応したかは、今日からでも想像に難くはない。

さて十月三十日の初講演は、ニュー・ヨークのチカリング・ホールという一二五〇の座席を有する建物で行われた『多数論』であった。入場券は売切れの盛況であったが、これほどの多人数に話したことの無いアーノルドの声は、全体によく通らず、会はむしろ失敗に終った。そこで彼は、すすめる人もあり、発声法のレッスンをとって、どうかこの難点を乗り越えることが出来たのであった。

翌月の六日、ボストンに向ったアーノルドは、この旧都を中心とするニュー・イングランドの地に、ニュー・ヨークよりも遙かに身近かなものを感じた。父トマスに対する親しみの情がここには強く残っており、彼自身の著書も熱心に読まれていた。またこの土地で、彼は自分の講演の最上の聴衆を得たのであった。ここでO・W・ホームズの司会のもとに『多数論』を講演したのを皮きりに、ニュー・ポート、ダートマス、ハートフォード等の町を巡回して再びニュー・ヨークに帰り、ブルックリンで三五〇〇の大会衆の隅々まで声を届かすことが出来た時は、将来の講演に對する自信をつけたのであった。月末に二度目のボストン入りをして三週間たらずの間ここを本拠として近郊の各地

を巡回したが、有名なチャールズ・エリオット・ノートン教授の家に妻と共に数日滞在したのはこの時であったと推測される。永らく苦心して書き上げた『エマスン』の初演は、十二月一日にボストンのチカリング・ホールで行われたが、一般公開に重きをおいた彼の講演旅行では、文学的なこの『エマスン』は大学などの限られた集り——例えばウエルズレー女子大学のマティネの如き——に主として用いられたらしい。住民が教育に非常に熱心であったニュー・イングランドの各地では『文学と科学』を、大都市では『多数論』をやるのが大体の方針であったことが、故郷の友リーフ宛の手紙に認められている。

ラッセル編の書簡集からボストンを中心としたアーノルドの巡回先を拾い集めてみると、ニュートン、ウスター（ウォセスター？）、セイレム、アムハースト、コンコード、アンドーヴァー等がある。そしてこのような小都市の講演の旅の有様は、前記のリーフへの手紙で次のように描かれている。「駅には出迎えの人々が来ています。そして六時に、英国式とは全くちがいますが結構な夕食が出されたのち、八時十五分前に馬車で会場に運ばれます。講演をすませてからまた馬車で送り帰されるのが九時半、それから大抵はリセプションと夜食があります。」またついでにここで彼の収入についてふれておくと、ニュー・イングランドの小都市では一回一五〇ドルの謝礼——これはアーノルドに云わせると一般の相場より五〇ドル高い由——大都會では一枚一ドルの入場券で、売ただけ懐に入ることになっていた。時には、例えばフレモント・テムプルで行われたボストン最後の講演会では、二千の入場券を半額の五〇セントにするとというサーヴィスもあった。このようにして五ヶ月たらずの間に得た収入は六千ドルとトリリングは評価している。そもそもアメリカ遊説を思立った最大の動機は、視学官の俸給が充分ではなく、最近政府から与えられるようになった二五〇ポンドの年金を加えてみても、引退して老後の生活を楽しむことはおぼつかないという考慮にあったものらしいから、この金額は予期したよりは少かったとしても、まず満足のゆく収入であったと思われる。然しこのことは、他面においてアーノルドには不利に作用した。つまり舌一枚でアメリカに金儲けに来たという考えが、先に

述べたような彼に対する悪口に拍車をかけたのだとトリリングは言っている。

十二月中旬に、アーノルドは再びニュー・ヨークにまい戻っている。それまでに彼はプリンストン、イェール、ニュー・ヨーク市立大学のブルックリン・カレッジ等の大学でも講演したらしいが、書簡の中ではそのことに直接の言及がなく、詳らかでない。十七日にワシントンに向い、ここを根拠としてポールティモア、リッチモンドまで足をのばした。後者のヴァージニア州の首都は、アメリカの旅の最南の地であったが、清教徒ならぬ、イングリッシュ・ジェントリーによって植民され、いまだに親英色のこい南部の社会は、アーノルドにとってより居心地のよいものであった。「もしも私が視学官をやめるまで命があつたなら、もう一度来て南部とキャリフォルニアに行ってみたい」と妹フランシスに対して書き送っている。またここでは、その職掌がら黒人の小学校も視察した。そしてセグリゲイションの事実を目のあたりに見たのだが、直接これについて論じることはなかつた。ポールティモアではたまたまクリスマス前の季節に当り、また恐らくは土地柄もあつて、僅か二〇〇の聴衆という最悪の入りを経験したが、クリスマス当日の午後には大統領にホワイトハウスに招かれ、次に訪れたフィラデルフィアの町が、ボストン以上に気に入ったことで幸に埋合せがついたようである。

一八八四年の正月をアーノルドはニュー・ヨークで迎えた。然し年末から元旦にかけて二三日息をついたと思うと、二日にはもう州の北部まで出かけ、夜行で三日の朝戻ると、その日と翌日にはマンハッタンとブルックリンで講演をするという多忙ぶりである。元旦に妹に書いた手紙から、十八日の同人宛の手紙まで十七日の空白があるために、書簡から彼の足跡を詳しく辿ることは出来ないが、とにかく正月上旬にニュー・ヨークを出発し、同州北部の町アティカを経てカユীগ湖畔のある小さい大学に立寄り、バファロー、ナイアガラ、クリーヴランド、オーバリン、デトロイトを廻って十九日の夜シカゴについたことは確実とみられる。容易に想像されるように、シカゴは彼にとつて「東西アメリカの中継地点となっている人口六〇万のいっこうに面白くない大都会」であつた。ここに約九日間腰

をすえて、ミルウォーキーその他の近在を行脚したらしい。そして二十九日には、われわれはセント・ルイスに彼を見出すのである。ここは彼の旅行の最西の地であったが、大河に臨んだ英、独、仏の寄相世帯のこの町は、大いに彼の興味をひいた。「われわれ英国人の宗教熱に、南方的な情熱がまざり合つたこれらの人々の間で、どんな情景がくり上げられるか、想像してもごらんさない。然し私にはセント・ルイスは大変面白い所です。もちろん非常に不潔だし、アメリカのすべての町と同様に、建物には少しも美しいところがないのは憂鬱ですが、古い都会で、かつ寄相世帯の町なので、その二つの趣をかね具え、お蔭で一般のアメリカの都市のもつ深刻な低俗さ(Gemeinheit)をまぬがれています。」と彼は妹に宛てて書いている。

二月三日にインディアナポリスに向い、翌日同地で講演、五日にはオハイオ盆地に入り、オハイオ河の増水に脅えているシンシナティに二三泊して、すでに殆ど暗記してしまつた『多数論』をくり返した後、九日にはクリーヴランドに姿を現わしている。この町の会場が大入りであつたことに彼は大満悦であつたが、実はジョン・ヘイという彼のファンが、売残りの切符を買占めて人に配つたという舞台裏の工作は少しも知らなかつた。そこから再びバファローにとつて返し、十二日にカナダ入りをしてトロントについた。このあたりで再び二週間の御無沙汰があるが、後の手紙からして、モントリオールとケベックにも行つたことがわかる。弟のウォルターに宛てた唯一の米国便りには、「この大陸で私がみた町のなかで、ケベックが断然一番面白い町だ。シカゴの金持の豚肉屋になるよりは、ケベックの貧乏司祭になつた方がましだと思ふ」と書いている。カナダからの帰途ボストンに一泊、ニュー・ヨーク州のオルバニーに立寄つたらしいのであるが、この町では一五〇人という不入りのレコードを作つた。二十五・六日にニュー・ヨークに戻り、三月一日に最後の講演を行つたこと、長老派の神学校と女子の師範学校でスピーチをやつたことが書簡から知られる。そして五日に往航と同じ「サーヴィア号」で故国に向つたのであつた。

不充分ながら私の跡づけ得たアーノルドの足跡は以上の如きものであるが、これほどの盛り沢山のスケジュールを

無事にきりぬけることが出来たのは、ひとえに視学官としての多忙な生活で鍛えられた体力と精神力のお蔭であつたと云えよう。半年に近い旅行のうちには、アメリカについての新発見も色々あつたのであるが、それは後に譲り、この国で彼がどのような人々に会っているかを一瞥しておきたい。

カーネギー、ヴァンダービルト出の一夫人(シエバード夫人)に会つたことは既に述べたが、旅先の土地々々で、彼はその一流の実行家、金持に会い、招待され、泊められている。教養の神様にもこれは少しも迷惑でなかつた許りでなく、アメリカ人の底知れぬ親切にはよほど心を打たれたとみえて、度々このことを故郷に書き送っている。政治家としては前述のグラント將軍、アーサー大統領のほか、ワシントンでは数人の上院議員に紹介されて、どこの国に出しても恥かしくない政治家だと感心している。学者、作家としてはO・W・ホームズ、C・E・ノートンの他にはコンコードではエマスン夫人に招かれ、ハートフォードではハウエルズによってマーク・トウェインに紹介されている。アメリカ側の資料によれば、アーノルドはすっかり彼が気に入つたことである。ワシントンではまたヘンリー・アダムズにも会っている。これらの人々が逆にアーノルドをどう見たかということも至つて興味深いこと柄であるが、いまはそれにふれる暇はない。われわれはアーノルドのアメリカ文明觀に眼を転ずることにしよう。

アーノルドほど、その一生を通じて、主要な思想に変化の少なかつた人はまれであらう。彼のアメリカについての考えを歴史的に辿ってみると、第一に目につくのが“*la dure intelligence des Anglo-Américains*”と云うミシュレーから引いたと思われる一句であるが、これが始めて用いられた一八四八年二月二十四日の親友クラブ宛の手紙から三十四年たつて書かれた『アメリカ管見』に再び利用され、更に六年後の『合衆国の文明』にも引かれている許りでなく、この句の前半の三字が一八七七年のノートブックにも書きとめられていることは、^(註二)この事実を如実に示していると云えよう。これが単なる他人の意見の借用にすぎぬものでないことは、彼のアメリカ觀の形成の過程を辿つて

ゆくにつれて明らかとなる。また同じく四八年三月七日、母に宛てて書いた、「英国は今のところ住みよい国であるとは思いません。アメリカ流の道徳的、知的、社会的俗悪さにも勝る大波が、われわれの頭上に襲いかかるうとしているのが目にみえています、」という言葉を、「世界は大衆にとってはますます住み心地よく、天賦の才を恵まれた者にはますます住み難くなる傾向にある、」というクラフ宛の言葉(五二年七)と並べてみる時に、われわれはアーノルドの一生を支配した社会観の根柢にふれるのである。

クラフ宛の書簡をよむに当って、たまたま彼がアメリカに幼時を過したことから、ヤンキーの兄弟分扱いをされ、そうしたクラフに対するアーノルドのからかい半分の誇張がふくまれている点を忘れてはならない。然しそれにしても、貴族にとって代って支配者となったアメリカ人について「天なる父がひよろ長い、不細工な、黄色いごろつきどもを往来や畑のなかからかき集められた時に、せめて手や顔ぐらいは洗ってから名譽の座につくのでなくてはあまりにひどいというものだ」(五二年十二)とか、「地球が偏平球体だということは知っていても、知る価値のあることは何一つ知らぬアメリカに教養人が絶無だということ云々」と言う時に、そこにあるものは決して誇張のみではない。「親兄弟の血のつながりについては、魂の關係が唯一の大切なものです。そしてわれわれはアメリカ人よりも、仏・独・伊の人々に対して遙かに多くこの關係をもっています、」と母に書き(六一年十二)、また同じく母に宛てて姉ジェーンの夫、国会議員のウィリアム・フォースターについて、「さぞかしウィリアムはアメリカ問題で頭を悩まされていることでしょう。人はたわごとのみで生くるものにあらず、ということをアメリカ人が悟らぬうちは、彼らの病が癒らぬのは当りまえだと彼に言つて下さい」(六一年二)と書いているのをもても、アメリカに対する彼の同情が薄かったことは明らかである。

公にされた著書のなかでアメリカについて語る時に、以上のようなあからさまの悪口を謹んでいることは勿論である。そもそもアーノルドの散文、ことに社会批評は、常に一種の対人説法であって、想定された読者に対する周到な

計算がなされているのである。周知の如く、彼のこの方面での終生の対象は中産階級の「俗物」(Philistine)であったが、この俗物がいかに偏狭、頑迷の徒であるかというのを、永年の視学官の経験から彼は身にしみて知っていたのであった。宗教的には非国教派新教に、社会的には自由主義、物質的実利主義にこり固った「一冊の書物の国民」の牙城を攻め落し、彼の古典主義、全人的完成をめざす教養の説に彼らを改宗せしめるには、極力正面衝突をさけ、敵の腹背に廻る戦術をとる他に手はないと彼は見ていたのである。批評の効用が実践とは無縁の柔軟な精神の働きであるときくり返し力説しているのも、俗物の性格の認識からくる考慮に由来するところが多分にあるといえよう。このことはアーノルドの文体の評価にも関係がある。当時の読者に対して与えた彼の文章の効果は、八・九十年を隔てた今日の第三者であるわれわれのうける印象とは相当に異つたものであつたであらう。散文家としてのアーノルドの真価は、社会批評ではなく文学評論についてみるべきである。理知の柔軟性(Flexibility)批評の非功利性(disinterestedness)の主張にも拘らず、彼の社会批評は、ある意味で実に強い実践的意欲に出たもの、一種のポレミックとも言ふべきものだからである。『教養と無秩序』以降の社会評論にみられる同一文章のあくことのない反復、俗耳に入り、その頑なな心に喰いこんで彼らの思想改革の酵母となるべく工夫された数多い新造語、読者の自尊心を逆用して結局苦い薬をのませてしまふ巧妙な迂回作戦等々をみると、時としては彼の短詩『パラディウム』に似た悲壮な感銘を、時としてはまたプラトンの対話篇に見られる誘導間的な狡猾さの印象をうけるのであるが、決して名文とは感じられないのである。

『教養と無秩序』(Culture and Anarchy)の序文において、浅薄な樂觀的アメリカ礼讃者である自由党議員、プライトとルナンの言葉を取りくませ、いかにも不本意といった身振りでルナンに軍配をあげているのは、こうしたアーノルド的戦法の一例である。ルナンの言葉というのは、「アメリカ合衆国の如く、何らの真面目な高等教育をもたずして、相当程度の通俗的教育を創りだした国は、凡庸な理知、俗悪な風習、浅薄な精神、一般的な知識の欠除によつ

て、長くその罪を贖はねばならないであろう」というものであるが、しかしこの書物においてわれわれにとって最も重要な点は、アーンホルドのアメリカ哲学の根本的なテーゼが始めて明瞭に打出されているところにある。

「この試論において、わが国の社会が蛮人 (Barbarian) 俗物 (Philistine) 衆愚 (Populace) の三者から成っていること、そしてアメリカは蛮人を全く欠き、衆愚を殆どたぬわれわれ英国人自身であることが明らかとなるであろう。この故に米国人の大部分は俗物ばかりということになる。但しその俗物たるやわが国のそれよりも活気があり、わが国の蛮人の圧力と偽りの理想とを除去されてはいるが、それだけに自己以外に依るべきものを持たず、存分に力を振うことを許された俗物である。而して英国の俗物主義の最も強力にして、その心臓部に当るのが清教徒のヘブライ化的中産階級であり、そのヘブライ化が彼等を教養と全体性とから隔離することをわれわれが已に知っているように、米国民がこの階級の子孫であり、その傾向——即ち人間精神の領域及び人間の必要とする唯一のものについての狭い見解——をひき継ぐものであることはかくれもない事実である。メインからフロリダに及ぶアメリカ全土の住民はヘブライ化をこととしてしている。書物のみから得た知識によって一国民について語ることの困難は承知の上であるが、以上の事柄はまず誤りないものと信ずる。私の言わんとするところは、合衆国において人間の精神的な面が活動にめざめる時には、それは通常宗教的な面、しかもごく狭隘な宗教的な面であるということである。」

この一文からもわかるように『教養と無秩序』では、主としてアメリカ的俗物の宗教面が扱われている。俗物の清教主義、或いは非国教派新教主義の欠陥は、国教と手をさることによって「国民生活の主流」から自からを隔離し、好んで狭い新教主義の牢獄にとじこもったことであった。彼らは専ら行為、道德の問題にのみ没頭して、人間性に内在する他の欲求への本能を殺すことによって教養の理念にそむくのである。引用文にいう「全体性」(totality)とはとりも直さず教養の追及する人間の完全性(perfection)を意味するが、英国中産階級のこの病弊はそのままアメリカに受けつがれているが故に、アメリカ人が国教のないことを誇りとすることは、逆に彼らが国教的中心性(centrality)

をもたず、地方根性(Provinciality)に陥っていることを告白するにすぎないと彼は見るのである。然しアーノルドはいまさらアメリカ人に国教をもてと言うのではない。ただ彼はアメリカにとって真に致命的であるのは、彼らが追従者の甘言にのって、実は自分に著しく欠けている叡知を持つている許りか、世界で最も知的な国民であると信じ込むことにあると警告を発するのである。注意すべきは、この警告は決してアーノルド的作戦のかけひきではなく、ここに彼のとく、そして彼の自ら具えている、教養、理知の柔軟性の真骨頂が存することである。

『雑論集』(Mixed Essays)に収められた『民主主義論』と『平等論』では、以上の如き宗教上の欠陥から発する社会的欠陥が指摘されている。民主主義一般についてアーノルドがどの様に考えていたかをここに詳述する余地はないが、これについての彼の考えはE・M・フォースターのそれに近いもので、民主主義は人間により多くの自由を与えるが故に他の体制に勝るものであるが、結局は一つの必要悪であると考えていると言つてよろしかろう。ただフォースターが全体主義を怖れたのに対して、アーノルドは「アメリカ化」を患えている。そしてこの傾向を阻止するものとして国家の理念を導入しようとするのである。「英国民が民主主義の成長とともにアメリカ化することを防ぐには、如何なる力がわれわれに役立つであろうか。思いきつて私の与えたいと考える解答を言つてみれば、それは国家の力である。」「不可避的な事態の推移がわれわれの自治を実際にアメリカのそれに似たものとなした今日、われわれが貴族階級のうちにもつていた国民的威厳の保証が失われ、或いは弱められた今日、これに代る国家をもまたわれわれはもつていないのであろうか。もしもそうであるならば、その時にはアメリカの危険は真にわれわれの危険となるであろう。即ち大衆が権力を持ち、しかも自からを高め導くべき適切な理想をもたぬことから生ずる危険がそれである。」「民主主義論』からの上の二つの引用文でアーノルドが国家と称するものは、人間の自我(Dei self)を代表すべきものであつて、一般の英人の毛嫌いする官憲の干渉でもなければ、官僚主義でもないものである。世界の貴族のうちで最も優れていた英国貴族は、かつて英国民の師表として高い理想、洗練された生活態度、美への欲求等を国民

に指し示したのであるが、次第に物質主義化すると共に知的欲求を全く欠き、狩猟のみをこととして立派な体格とつろな頭の持主——即ち蛮人と化したのである。その結果生ずる俗物の支配の欠陥を精神的な面において補うものが教養であり、社会、政治の面では国家であると彼は考えるのである。

英国の中流、下層階級には全くエミアブルなところが無いのに対してフランス国民が農民、労働者の末に至るまで、実に洗練された社交性と風習をもっているのは、その社会的平等のたまものである、というのが『平等論』の趣旨であるが、そのなかでフランスとアメリカとを比較して「恐らくアメリカにおいては、この様な社会生活と風習の高い水準が生れる前に、社会的平等をもつことの不利が認められるであろう」と言っている。またアメリカの教育の一面にふれて、『教養と無秩序』で彼は次のように云う「中心性を欠き地方根性を具えているビーチ氏やノイズ氏の自由教会が、宗教においてヘブライ化主義者を造り、完全な人間を造り出すことのないのと全く同様に、エズラ・コーネル氏の大学は、彼の真に尊敬すべき気前のよさの金字塔ではあるが、甘美と光明をではなくして鉞山技師、技師、建築家を造り出すべく意図されたものと思われる。」また「人々をして彼らの聖書と新聞を読み、彼らの実務についての実際の知識を得ることを可能ならしめ、かつこれを奨励することは、本来の意味の教養がなすほどに国民の高い精神生活に資するものではない。而してこの本来の意味の教養というものが、ルナン氏の指摘するように、アメリカが欠いている当のものなのである。」以上のように功利的・物質的産業主義の根源を清教主義のうちに見出すことにおいて、アーノルドはマックス・ウェーバーなどの先駆をなすと言えるのではなからうか。

「アーノルドは渡米の前年の五月に、始めてまとまったアメリカ論『アメリカ管見』(“A Word about America”)を『十九世紀』誌に発表したのであるが、その趣旨は上記のものと少しも変っていない。ただその論調が、アメリカ人の心をくんで一層慎重になっていく点が違うだけである。殊に翌年渡米するとは夢にも思わず、ただ書物の知識のみによって未知の国を論ずる危険を彼は充分に意識していた。アメリカ人の自己弁護やお国自慢の言葉を引用しなが

ら次第にその根柢をきりくずして、彼らが俗物なる以所を納得せしやうとするアーノルドの手腕は感服の外はないと云うべきであろう。アメリカ人俗物説を立証するために、彼は『デイヴィッド・カプフィールド』を利用する。即ちそこに描かれている陰陽二種類の俗物がアメリカの社会に存在していることを指摘することによって自説の正しさを証明しようとするのである。彼は陽性的俗物クイニオンをマーク・トウェイン的ユーモアのうちに嗅ぎ出し、陰性的俗物マードストーンの実例をイサベル・ルシー・バード女史のロッキー山中での生活実録に描かれている辺境の一家族——激しい労働と、頑迷、偏狹な宗教のみに生みる人々——に見出ししている。そしてこの二種類の俗物の影響がどれほどアメリカの生活のうちに浸入し、これを低下せしめているであろうかと問い、「これらの英国中産階級の生んだ鬼子は、英国よりはアメリカにおいて一層猛威をふるっているに相違ない、」と断るのである。最後に、この欠陥を救うものは、英国の必要としているものと同じく、中等教育の改良である。何故ならば、「ローウェル氏の云うように、アメリカの国民は世界で最もよく初等教育をうけ、最も教養の乏しい国民であつて、より高く、より広い教養、より明晰な理知 (Quidity) を必要としている」からであると結論を下している。

アーノルドがアメリカに携えた講演の一つ『文学と科学』(“Literature and Science”)は渡米の前年に『十九世紀』誌に一度発表されたものであるが、これが彼の中等教育論であつて、教育の使命は自然科学の発見の人間化、生活化であつて、その為にいかに古典文学の知識が必要であるかを説いたものである。私はここでアーノルドの教育論に深入りする暇はないので、もう一つの講演『多数論』(“Numbers; or the Majority and the Remnant”)を一瞥しよう。この講演で彼はアメリカ人の俗耳に入りにくい苦言を、一流の糖衣に包んで提供しようとする。即ち彼の説いているのは、多数者というものが決して樂觀的民主主義者の主張するように常に善なるものではなく、むしろ「残れる僅かのもの」(remnant)こそ社会の支柱であるという主張である。「残れる僅かのもの」とは『イザヤ書』から借りた言葉であつて、真なるもの、高きもの、正しきものを知り、常にこれを保つてゆく少数の哲人、予言者を

さす。国家の存亡は懸つてこの少数者に聴くにある。従つて「万が一にもアメリカ民主主義において、如何なるものにせよ高いものに心を向けることが怠られ、それが病となつて諸君にとりついているということが真実であるならば、この偉大なアメリカの生活といえども、日々にその健康はむしばまれ、終には死に至るはかばかない」のである。ここでアーノルドは一風変つた算術をやってみせる。つまり、社会の健康は少数者の力に掛つているのであるが、その社会の人口が多ければ少数者の数も増大し、力も強くなる。従つて五千万の大人人口をもつアメリカは、この点非常に有利であり心配は少いというのである。純然たる第三者からみれば、この算術のカラクリは見えずいているが、當時の一般のアメリカ人の樂觀論と数の信仰を満足せしめると同時に、少数の知識人を以て任ずる人々をして「残れる僅かのもの」の一員であると信ぜしめるといふ、一石二鳥の妙計であつたとも考えられよう。更にこの講演にはもう一つの甘味がそえられている。それは現代のフランスがそのあらゆる優秀性にも拘らず、淫逸の女神アセルゲイアの崇拜という重大な欠陥をもつことを、フランス国民の成立から長々と説きおこし、これに反してチュートン系であるアメリカ国民がこの病を免れていること、それが清教主義の賜物であることを指摘していることである。この一篇は実にアーノルドの説得戦術の典型とも見るべきものである。

以上はすべてアーノルドの渡米以前のアメリカ論であつたが、次にわれわれは彼の持論が実地の見聞でどのような修正をうけたかをまずその書簡に立戻つて調べてみよう。コネティカット州の首都ハートフォードで一夜の宿を提供されたクラークなる人の家から、彼は次のように妹に書き送つた。「この家は私が英国で視察の旅の途中で泊つたいくつかの富裕なクエーカー教徒の家庭とそっくりです。ただ主人のクラーク氏の宗教についての考えは遙かに自由なもので、家族全体も、英国の中流階級に比べてより多くの明るさ、楽しさ、そして抑制からの自由をもっています。こうした特色はこの国全体に互つて見られるもので、英国の中流階級が貴族階級の夢魘に悩まされているという私の持論を裏書しています。この一般的な人生の享樂と人の好きが、アメリカで最も印象的なものです。その代りに最上

の英国的特質のあるものが全く姿を消しています。静寂を愛し、雑踏を嫌う心は全然見当りません……ケンブリッジのノートンを除いて、不断のパブリシティと朝から晩までの活動を望んでいない人間には、まだ会ったことがありません。これは随分としんの疲れることです。」(八三年十一月十五日) アメリカ社会の貧富の差の少いことについては、「私の気に入ったのは、われわれよりずっと下の人々が、知識階級の生活と享楽のなにがしかの分け前に与って生活していることです、」と妹に語り(八三年十月二十八日)また旧著『文学と教義』(Literature and Dogma)に關連して次のような感想を一人夫人に送っている。「単なる因襲の力はここでは英国より遙かに弱く、古いものは既にその役割を果してしまつて他のものにとつて代られねばならぬということを認め、主張することを恐れる気分もずっと少いのです。従つてこの人々は、少くとも教育ある階級では、英国に比べると、一般大衆の信じている新教についての現実の事態を見まいとする傾向も少く、私の著書を単に驚くべき改良を主張するものとして、警戒する態度もあまり目につきません。このために人は何らの制肘をうけずに書物の真価をみてくれます。」(タロツパ夫人宛 八四年二月七日)

アメリカの自然については、概して絵画的なものに乏しく、従つてアメリカ人は美術的感觉に欠けているという。(妹フランシス宛 八四年一月十八日) 然し一大水柱と化したナイアガラ、凍結したカエーガ湖上の風景、セント・ルイスの大河の沿岸、ミシガン湖等の風景は氣に入っている。都会についての二三の意見は既に述べたが、ニュー・ヨークについては、その町の富でいることに驚き、ニュー・ヨーク湾、イースト、ハドソン二大河の美しさは認めるが、定住したいとは思わぬと娘につげている。(八三年十月二十七日) またシンシナティの印象としては、他の多くのアメリカの町と同様に、あまりにも未完成であり、工事中のひどい道路、取片づけられていないガラクターや資材の山等で、まるで土建屋の手をまだはなれていない新開地のようだとあるが(タロツパ夫人宛 宛前出番簡) シャーウッド・アンドアソンの短篇小説に描かれたこの地方の町の様子を考へ合せると、充分想像がつくように感じられる。

さてこのような実地検証を経た後のアメリカ論をわれわれは二篇もっている。八五年二月に『十九世紀』誌に発表

された『アメリカ再論』(“A Word More about America”)と、同誌八八年四月、即ちアーノルドの死んだ月の号にのせられた『合衆国の文明』(“Civilisation in the United States”)とである。このうち後者の方が重要であるので、前者はごく簡単に内容を紹介するに止めたい。

従来自分は「民主主義とは一つの政治形態にすぎぬ」というシェラーの言葉を信じ、制度というものは単なる手段(machinery)であつて、それ自身で価値あるものではないと考えていたが、これは多少修正を要する考えであることがアメリカに来てみて解つた。アメリカの制度はその国民に実によく合つたもので、彼等はそれから多大の現実の利益を得ている。アメリカ流の民主主義体制は、云つてみれば実によく人体に合ひ、緩くあるべきところは緩く、密着すべきところはピタリと体についているのみならず、体の成長に応じて大きくなってゆく服の様なものである。アメリカ人はこれによってその政治的・社会的問題を見事に解決している。この国には、欧州諸国に比べると、革命の危険が殆どないが、これは階級的差別が無に近いこと、貧富の差はあつてもその間の交流がより自由であり、職業の転換がはげしく、貧乏は不便とは考えられても恥ずべきものとは考えられないために、富者への怨みが少いからである。こう述べる一方、アーノルドは合衆国の地方分権制を何らかの形で英国に導入することによって、アイルランド問題の禍根を断つことが出来るのではないかとこの考えもつけ加えているのである。このように、英国の俗物の社会の延長とみなしていたアメリカの社会が、その平等主義と民主主義体制によって、予想以上に良いところをもつてゐることを発見したのであつた。然し、とアーノルドは云う、「思想家の所謂政治的・社会的問題にあまりにも心を奪われて、人間の問題を忘れてはならない、この二つは関連した問題ではあるが、同一の問題ではないのだ。」英国のジェントリーの階級に属する者は、人種と言語の共通という事実にも拘らず、合衆国に住むよりは欧州諸国に住みたいと思ふだろう。それは彼らの考えによれば、政治的・社会的問題はどうかと、人間の問題が合衆国では解決されてゐないからである、こうアーノルドは結んでゐる。

さて、この最後の問題、人間的問題の解決という点が、『合衆国の文明』の主題をなすのである。まず彼は文明とは「社会における人間の人間化、社会における人間性の眞の法則を満足させることである、」と定義する。ついで『教養と無秩序』以来お馴染の人間性に内在する四つの本能の説をくり返す。即ち行為（宗教・道徳）知識（科学）美（芸術）社会生活と風習（政治、社会）を追求せんとする欲求がそれであり、この四者がすべて満たされなければ、人間性の眞の法則は満足せしめられず、従つて文明も完全なものとはならない。勿論これは到達不可能の一つの理想ではあるが、この理想の認識は欠くことが出来ないのである。次に最も通俗的な意味——生活の慰安と便宜という意味——における文明という尺度で英米の社会を比較計量するのであるが、その際に彼は滯米中の見聞を活用して色々と細かい比較をしている。結論のみを云うと、英国のジェントリー階級、即ちパブリック・スクールと大学を出て知的職業、官職等についたり、文学やジャーナリズムに携わる人々にとつては、英国の方がはるかに住みよい土地であるが、他方年収三・四百ポンド以下の一般大衆にとつては、アメリカの方が楽である。彼らは第一に金持となる機会が英国よりも多く、また低級な種類の仕事の賃金はより高く、高級な職業に対する俸給はより低い社会に住んでいるからである。英国に比べてアメリカでは、例えば官吏の収入はより低く、彼の傭う小使の給料はより高い。これは社会のより多くの成員にとつて生活が楽であることを意味するが、アーノルドはこれを以て直ちにアメリカ文明の優越の証拠とはみなさないのである。

ここで彼は少々鋭鋒を収めてアメリカの平等社会のもたらす二つの美点をあげる。その一つは些細ではあるが意味深いもので、英国人が Mr. と Esq. の二つの称号を使い分けることによつて無用の神経を使い、相手の自尊心を傷けたりしているのに対して、アメリカ人が Mr. の一本槍で甚だすつきりしていること、もう一つは、アメリカ婦人の態度が、英国中流婦人のそれよりも自然で無理のないことである。この点は確かにアメリカ文明の美点というべきであるが、然し一国が商工業と富において、自由や平等において、教会、学校、図書館、新聞の教において優れてい

るといふ理由で文明国であると主張されるならば、真の人間性はそれに対して異議を申立てるであらう。このように論じてアーノルドは、文明の欠くことの出来ぬ特質として彼が今までに用いたことのない一つの新しい範疇をもち出す。つまり文明は「興味を起させるもの」(interesting)でなくてはならないと云うのである。この概念は『平等論』の中で、英国中産階級が造り出した生活の「無限の退屈さ」(immense ennui)と呼んでいるものの裏にあたるのであるが、おそらくこれはカーライルの手紙から直接暗示されたものであらう。その手紙を彼はすぐあとに引用しているのだが、アメリカ移住を決心した弟に対してカーライルはこう書いているのである。「お前は古いスコットランドの歴史と光輝ある制度と貴い理想とを忘れ、お前の心にとつて興味あるすべてのものから自分を追放することが出来る気なのだろうか。しかも幾分ましな飯を食うために！」(筆者)然しこの新範疇はともあまり適切なものとはいえない。「興味を起させるもの大いなる源は高貴と美、即ち高められたものと美しいものである」という主張はなにかぎこちなさを感じさせる。それはさておき、アーノルドはまずアメリカ文明にどれほどの美があるかと問い、その都市と建築が著しく美を欠くこと、また他の美術、文学においても同様であることを指摘する。次に高貴(distinction)の方は如何といえ、アメリカ文明には、人の心を高めることを妨げるものは甚だ多いが、これに資するものは少いと云い、「畏怖の念を起させるものは人間の最も上のものである」(Das Schaudern ist der Menschheit bestes Theil)と云う『ファウスト』第一部からの句を引いて、清教徒の厳粛強烈な宗教が死に瀕している今日、アメリカ人はこの畏怖と尊敬との訓練を欠いていると断じているのである。政治家と時事評論家の宗教と化した「普通人」(the average man)の讚美は、まさにこのことを証している。そしてこの態度の現れであり、かつまたこれに拍車をかけるのがアメリカの新聞である。「もしも一国民全体に互つて、尊敬の念と高尚なるものに対する感情を抹殺する最上の方法を発見したいと思うならば、アメリカの新聞をよむに如くはない。」とまで彼は極限する。多少の例外はあるにしても、大多数のアメリカ新聞は愚にもつかぬ市井の出来事を一大ニュース扱いにする。アーノルド自身に関

係のある例を一二とり出してみると、電信による短かい速報欄のはじめに「マシュー・アーノルドは六十二歳」とあり、つづいて「ウェールズ曰く、メリーは可愛い奴だ」とあった。最初の方は誤報（六十一歳が正しい）であり、第二の意味は英国皇太子がアメリカの女優メリー・アンダソンを讚めたということである。これがアメリカのアテネたるボストンの新聞のことであり、シカゴにゆくと、「われわれは彼の着くのを見た」という大見出しがあつて、「彼は酷薄な顔立ちと横柄な態度をもち、真中で髪を分け、片眼鏡をかけ、よく合わぬ洋服をきてゐる」と書かれた。彼自身の例をひくことはアメリカ人に対してはまずい戦法ではあろうが、われわれはこれを以て、アメリカ人が「普通人」以上の高いものを嫌うことの例証と認めることが出来るであらう。

以上の如き論拠から「人間の問題は合衆国においては解決が甚だ不充分であり、この国の文明には大いなる空虚——高められたもの、美しいもの、即ち興味を起させるもの欠除——が存する」という結論が引出される。然も最も悪いことは、アメリカ人自身が世界一の文明人を以て任じ、自己のもたぬものをもっていると信じて全く己の欠陥に氣づかぬこと、更にまたこの欠陥を指摘する批評家が絶無に等しいことである。このためにアメリカの欠陥はいつまでも改められそうにない許りか、却つて増大しつつある。そしてこれに対処する道は、彼らの中に少からず存在している指導者たる識者が、冷静で正常な批評を国民に与えることにある。

以上私は出来るだけ忠実にアーノルドのアメリカ観をまとめることに努めた。さてこのようなアメリカ文明批評がどれほどの妥当性を有するかについては多くの疑問が存在しよう。私は専門的な社会学、政治学、経済学等からの批判を云っているのではない。私は一般的に言つて文明というようなものについてはこれらの専門家の抽象的分析よりも、文学者の具体的、印象的批評の方を信用するものであつて、文明批評は何らかの哲学的な立場からなさるべきものと考えるから、問題となるのはアーノルドの「哲学」の当否ということになる。然しこれは到底早急には果せぬ仕

事であつて他日を期する外はない。更にまた、ここ数十年間にアメリカの社会に起つた変化のために、アーノルドの議論のうちに、事実と合わなくなつた事柄も多いであろう。然し私が滞米中に会つた欧州の学者、学生たちのアメリカ批判が、未だに多くの点においてアーノルドの説に合致するのに気づいたのである。ここに拙稿を起して粗雑ながらアーノルドの考えを纏めてみたのは、実は自分のための一つの準備としようという心からであつた。決してアーノルドの説がそのまま私の意見ではない。貴重な紙面をおさき下さつた編輯委員各位に深く感謝の意を表したい。

註一 最も重要なものは E. P. Lawrence: "An Apostle's Progress: Matthew Arnold in America" (Philological Quarterly, X (1931), pp. 62-79) Dr. Clifton Leonard: *Matthew Arnold in America* (a manuscript dissertation in the Sterling Memorial Library of Yale University) である。

二 The Note-Books of Matthew Arnold, ed. by H. F. Lowry, K. Young and W. H. Dunn. p. 277 ミンチーの註から引かれたものは不題。またニコソ宛の "des Anglo-Américains" が後の引用では "des Américains" と變つてゐる。

三 「ヘブライイ化」 *Culture and Anarchy* の一章 "Hellenism and Hebrewism" 参照。要するに人をしてロチロチのペーリタンにならしめることをいう。但しペーリタンの没頭する人間の行為の問題は、「人生の四分の三」に当り、ヘブルイズムが実に尊いものであることはアーノルドも決して忘れてゐるのではなからう。

文 献

Letters of Matthew Arnold, in 2 vols, ed. by George W. E. Russell. London, 1895.

Lionel Trilling: Matthew Arnold; London, 1939.

Five Uncollected Essays of Matthew Arnold. Ed. by Kenneth Allott. University Press of Liverpool, 1953. (Contents: A Word about America; A Word More about America; Civilisation in the United States; Sainte-Benve; A Liverpool Address; with introduction and notes by the editor) 英語書年九十九卷六号—百卷四号に西川正尚教授が "Civilisation in the United States" の訳註を施して知られるが、非常に有益なもので筆者は大いに恩恵を被つた。

The Note-Books of Matthew Arnold (註二参照)